

**最優秀賞受賞作**

私の目指すもの

竹下 和

中学生の時、全身麻酔で手術をすることになった。突然のできごとで、何が何だかよく分からず、手術の直前まで全く緊張していなかった。

しかし、手術当日、心配そうな家族に手術室の入り口で「行ってきます、寝ている間に終わるから大丈夫だよ」と笑顔で別れたのもつかの間、両親の姿が見えなくなった瞬間、とてつもない緊張と不安が私を襲った。部屋に向かう途中、足が震え力が入らず、歩けなくなりそうになった。その時、隣から「昨日はよく寝れたかな、緊張したんじゃない」と声がして、背中に優しいぬくもりを感じた。隣を見ると看護師さんがいた。その看護師さんは、私の身体にぴったりと自分の身体を寄せ、背中に手を回し部屋に着くまでの間、支え続けてくれた。そして、麻酔がかかる前は緊張で震える手をそっと握ってくれていた。そのおかげで、少しずつ、震えが治まり気持ちが落ち着いていくのが分かった。

あれから6年、今、私は看護師になるために大学に通っている。入学後、初めての授業で「看護には手と目でみてまもる」という意味があることを学んだ。あのとき、看護師さんは特別な治療をしたり薬を使ったりしたわけではない。私の様子を目と手を使い観察し、不安や緊張から私をまもってくれたのだ。

正直、勉強や実習を進める中で辛いことや不安なことも多くあり、何度も逃げ出したくなった。しかし、そんなときにふと思い出すのは、あの日の看護師さんだ。たった一瞬の関りが、今までの私をずっと支えている。看護の力は偉大だと改めて感じている。

最後に、あのときの看護師さん本当にありがとうございました。どんなときも私を支えてくれるだけでなく、私の目標でもあります。あの日、身をもって看護の本質や素晴らしさを学んだからこそ、今度は自分が患者さんの支えとなり、まもれるように頑張ります。

(選評)

手術を体験して、手術室看護師の優しさや手術看護の魅力に接したことが、看護職への道を選択するきっかけになり、その看護の力を、今度は作者自らがその力になろうとしていることに、多くの看護師が勇気づけられる素晴らしい作品です。

頑張って看護師を目指してください。

**優秀賞受賞作**

勇気と決意の3月

小澤 咲楽

“目を何度もパチパチさせる”この行為が、私の幼い頃からの癖でした。ドライアイでよく目を擦っていて、常に目薬をさす事は私にとって当たり前であり、私のルーティンでした。私は内反症(逆さまつげ)です。私は正直、自分の目が大嫌いでした。

中学生の終わりが近づいて来た時、ネットである記事を見つけました。内反症の手術をされた方の感想が記載されたものでした。その記事を読み、私は手術をすることを決意しました。

病院に行き、手術の日程を決めた日、私は不安と恐怖で胸がいっぱいでした。

「失敗してしまったらどうしよう」「どれくらい痛いのか」「本当に治るのか」私はそんな事をずっと考えていました。手術前日の夜は不安で一睡もできませんでした。あんなにも長い夜は初めてでした。

手術当日、私は不安で手が震え口は紫色になっていました。涙が止まらず、今すぐ逃げたい。そんな気持ちでした。そんな私に看護師さんは暖かいブランケットを掛け、私の手を握り、優しい言葉をかけてくれました。

「怖いよね、すぐ終わるからね。大丈夫、大丈夫」何度も何度も言ってくれました。

内反症の手術は、全身麻酔をしてしまうと術中に黒目を傷つけてしまうため、部分麻酔で行います。計三回、瞼と瞼裏に麻酔を打ちました。麻酔をしたとはいえ、メスが入る時は多少の痛みや不快感がとてもありました。

手術開始から一時間が経過した時です。「あと少しだよ、頑張れ、頑張れ」

看護師さんの声が聞こえてきました。私は看護師さんの声を聞き、また涙が出そうになりました。手術をして数日経ち、また病院に行くと、看護師さんが私に「よく頑張ったね」、そう言ってくれました。嬉しいような、何だか恥ずかしいような。

わたしの心は、ほわぁーんと暖かくなりました。

(選評)

手術は患者さんにとって、人生の大きなイベントです。術前から術後までの手術室看護師の支援が、手術をする患者さんの不安や恐怖の緩和に大きな役割を果たしていることが感じられる、嬉しい心温まる素敵な作品です。

エッセイ「私が手術室で出逢った看護師さん」（一般の部）

優秀賞受賞作

夢をくれた看護師さん

望月 彩絵

私は中学三年生の春に、埋伏智歯の抜歯により二泊三日の入院をしました。初めての入院・手術にも関わらず、スマホをまだ持っていなかったため連絡手段もない。また新型コロナウイルスの影響で親の立ち合いも禁止。一人で手術を受けることが私をどんどん不安にさせました。

そして迎えた手術日。朝からの手術だったため飲食はせず、担当の看護師さんと一緒に自分の足で手術室に行きました。本人確認や説明を聞いて、いよいよ手術室の中へ。そこには私の知らない世界が広がっていました。手術の器具で意外にごちゃごちゃしている変な空間、今から手術するとは思えないくらいポップな音楽が流れていたり。ドラマなどで見る「ピリピリ」している様子はなく、患者さんをあたたかく出迎えるような雰囲気でした。初めて寝ころんだ手術台。冷たくて、狭くて。まるで今の私の心境のようでした。一通りの手術の準備が終わり、遂に全身麻酔の薬の投入へ。酸素マスクを付けられて深呼吸を繰り返す指示と同時に、自分の心臓の音が急激にドクドクと速くなっていることを感じました。初めてのことで不安で押し潰されそうでした。その時、横にいた手術室看護師さんが私の左手をぎゅっと握って、

「大丈夫だよ。ずっと私がそばにいるからね」と声をかけてくださいました。今でも忘れません。氷が溶けたように流れたあたたかい一粒の涙。初対面にも関わらず、たった一言で患者さんとの信頼関係を築き上げることができる。そんな手術室看護師さんが魅力的でかっこよくて、憧れの存在となりました。

私は今高校二年生で自分の進路にも向き合わなければなりません。その手術をきっかけに強く看護師を目指そうと思いました。患者さんのそばにそっと寄り添えられる、一人でも多くの患者さんを救えるような看護師になりたいです。このような夢を与えてくれた手術室看護師さんに感謝しかありません。

（選評）

手術前の緊張感と患者の目に映る手術室の様子の描写、その中で看護師がどのように患者さんに寄り添っているのかがよくわかります。そして、自分の夢になった看護師という職業。とてもいい作品です。「たった一言で患者さんとの信頼関係を築き上げることができる。そんな手術室看護師さんが魅力的でかっこよくて、憧れの存在となりました」この言葉が、印象に残りました。